

## 第4章 転換期 エース不在の全員バドミントンで体質転換年表

- 1965年 (昭和40年) 1月恒例の部内での新年会始まる。  
関東大学春期リーグ戦で1部6位となり、初めて2部に降格する。
- 1966年 (昭和41年) 関東大学女子秋期リーグ戦で4部優勝し、3部昇格する。  
1年生部員が大量に退部し、部員数が減少する。  
第7回トマス杯に日本代表として宮永氏が出場する。
- 1967年 (昭和42年) 新入部員の確保困難となり、塾高との関係がより密接になる。
- 1968年 (昭和43年) 関東大学秋期リーグ戦で2部優勝し、1部復帰を果たす。
- 1969年 (昭和44年) 関東大学春期リーグ戦で1部6位となり、再度2部に降格する。  
関東大学女子春期リーグ戦で3部2位となったが、1位と共に2部に昇格する。  
その年の優秀者を表彰するため、部内3賞として、最優秀選手賞、新人賞、敢闘賞が制定される。
- 1970年 (昭和45年) 塾内にバドミントンの同好会が出来る。  
部員不足により、体育会のバドミントン部は存続の危機に陥る。
- 1971年 (昭和46年) 関東大学女子秋期リーグ戦で2部6位となり、3部に降格する。  
監督交代する。吉田氏から宮永氏へ。
- 1972年 (昭和47年) 大学、塾高、女子高で体育会バドミントン部全体での初の合同練習を行う。  
6月18日(日) 創部30周年記念式典が日吉にて行われる。  
リーグ戦の試合形式が3複4単となる。(従来は3復6単)  
主将上野、東日本3位となり東西対抗の東日本代表選手として出場する。  
インターハイ個人戦に塾高から梶田、清水が出場する。
- 1973年 (昭和48年) 監督交代する。宮永氏から岡本氏へ。

## 概説

1965年(昭和40年)主力メンバーが卒業し塾の戦力は急激に低下した。春期リーグ戦では最下位となり、入替戦で日大に敗れ塾は初めて2部に降格した。この前年の秋より塾では授業料値上げ反対の学園紛争が勃発し、教室は学生に占拠されたが幸い記念館は影響なく練習への支障は少なかった。この火種は後に各大学へ飛火していった。

1966年(昭和41年)この年新入部員がハードな練習についてゆけず大量に部をやめていった。女子は慶応女子高からの入部で部員を確保し、秋期リーグ戦に4部で優勝し3部へ昇格した。

成績は不振だったが学連への影響力は大きく、全日本学連の委員長に二方氏が就任した。OBでは宮永氏がトマス杯の代表選手として活躍し、又、小宮氏がユーパー杯の監督として貢献した。

1967年(昭和42年)この頃は新入部員の獲得が一段と厳しくなった。特に高校で力のある選手の獲得は2〜3年前から困難になっていった。成績重視の入試が行われた為でもあった。そこで塾高の強化が言われ塾高との関係は密接になっていった。

1968年(昭和43年)この年秋期リーグ戦で優勝し、入替戦でも関東学院を破り念願の1部復帰を果たした。この頃を境に練習の仕方に変化が現れ始めた。従来のレギュラーと一般部員との壁はなくなり、全ての部員が同じ練習を行なった。この事は、戦力のポトムアップを計ったが、力のある選手をより伸ばす点で問題を提起させ、後の塾の練習方法の疑問として残す事になった。

1969年(昭和44年)春期リーグ戦で1部6位となり入替戦にも敗れ2部に降格した。女子は秋期リーグ戦で3部で優勝し2部に昇格した。この年、部内3賞として最優秀選手賞、新人賞、敢闘賞が制定された。

1970年(昭和45年)戦力は年々低下し、部員数も減少し大学からバドミントンを始めた者も試合に出場していた。学生の意識に変化が生じ厳しい体育会の練習を避け、運動を楽しむ傾向が強くなり、塾内にバドミントン同好会が出現した。部員数の減少は部の存続を危機的状況にした。

1971年(昭和47年)新入生の入部で部員不足は一応解消した。塾高との合同の練習や合宿がこの頃から始められた。女子高も記念館で練習を行い、賑やかな合同練習風景がみられた。

1972年(昭和48年)この年からリーグ戦が3複4単となり、塾には有利であったが2部優勝はならなかった。個人では主将上野が東日本3位となり東西対抗の代表に選ばれた。一方、部員数が減り、OB会費の徴収が困難になったり、フルバイト収入が減ったことなどで、財政赤字となり解消にはその後2〜3年を要した。この年創部30周年の記念事業が行われた。

1973年(昭和48年)この年は、部員も増え戦力に上昇の兆しが見られ、2部の上位に進出した。大卒、塾高、女子高との連携も深まり、戦績は別に、部活動としては、明るく活況を呈した。

以上、9年間の概説である。1部から2部へと低迷期へと入っていった時代でもある。

部の弱体化は部員の減少にも繋がりがり大きな危機を迎えた。この事が組織力の強化の必要性へと繋がりがり、それまでは余り顧みられることのなかった塾高や女子高との連携が進んだ。又、OB会もこの部の危機を救うべく、力を結集し始めた時代であった。

(金原(大嶋)記)

## 女子一人奮戦記

ヤマシラール 水野 美奈子 (昭和41年卒)

学部の4年間、殆どバドミントンに明け暮れていたにしては、さてこうして当時の思い出を振り返ってみようとする、なかなか鮮明な映像が浮かんでこない。リーグ戦や、早慶戦の思い出もなんとなく無い。奮闘記などとても書けそうにない。当時は今よりずっと真面目であったので、実際にはかなり奮闘していたはずなのだけれども、その興奮や喜びや、悔しさなどは殆ど忘れかけている。ただ時折幾つかの場面があたかも昨日の出来事かのように思い浮かぶ……なかなか進んでくれない記念館の壁時計、日吉の銀杏並木でのウサギ飛び、多摩川までのマラソン、マムジ谷での駆け足、久里浜合宿での砂浜のマラソン、試合に行く上級生の切符の為に並んだ悪臭漂う上野駅の地下道、試合中アキレス腱を切ったときの力の抜けた足首、はじめての早慶戦のダブルスで震えが止まらなかったラケット……。こうして数え上げると、楽しい思い出と言いたいがたいように見えるかもしれないが、今となっては皆懐かしい。

ただ何よりもまず、今静かに過去を振り返ってみて、女子高以来7年間のバドミントン部での体験、経験が卒業後の人生にどれほどの支えになっていたかを思うにつけ、暖かく見守って下さった諸先輩や、同級生、下級生の方々にあらためて感謝したい気持ちで一杯である。

バドミントン部において、女子部員の少ないことは慢性化した悩みであり、リーグ戦や早慶戦が近付くとダブルスができるかと心配であったのは1度や2度のことではなかったし、退部したい部員を引き止められず自己嫌悪に陥ったことも度々であった。現在のようには知られてもおらず、人気もなかったバドミントンへ新入部員を勧誘するのは至難の業であった。そんな事を思い出すと、1番不思議なのは、なぜ私が高校1年の時に突如、バドミントン部へ入ってしまったのか、ということである。運動はむしろ嫌いで、運動神経もない私が先輩や友人の勧誘もなく、自発的に入部したのは正しく魔が差したという以外にない。女子高入部当時、幼稚舎の体育館を借りての男子高との合同練習は、大の苦手であった。女子高のバドミントン部も人数が少なかつたので、上級生の姿が見えないこともあり、そんな時は、1人男子部員の中に入って行く勇氣もなく、できるものなら逃げ帰りたいと思った。練習もきつく感じられ、当時はどうしたら退部できるだろうか



1965.11.17～23  
京都インカレ  
中央トレーニンング姿が筆者  
(大野氏)

と、そればかり考えていた。勇気のなさと、優柔不断さから、退部届けも出せずにいるうちに、少しシャトルも打てるようになり、下級生もできるという状態になり、今度は自分が他人の退部を思いとどまらせる立場になってしまった。こうなるとう抜け出せるものではなく、結局7年の長きにわたってバドミントン部に籍を置くことになってしまった。女子高3年の頃には、大学でバドミ

ントンを続けるのが当然と自分でも思い込んでいたようである。自主トレと銃打って、早朝自宅から外苑まで走っていたのもその頃である。階段を昇るのも大儀な今日、あの頃のエネルギーが何とも懐かしい。

女子部員が少なかったことは、本当に寂しかったが、大学でバドミントンに熱中していた頃は、今考えてみてもとても充実した時期であった。自分の能力への挑戦、指導力、人間関係など、バドミントンを通じて得たものは貴重な経験として今なお残っている。

機会あって、三田でトルコ語、日吉で美術を教えているが、日吉に行くたびに通る銀杏並木は、昔の思い出をあたかも昨日の事のように思い出させてくれる。

## 私の人生を運命づけた秋田の合宿

門倉 洋 (昭和43年卒)



1964.8  
秋田合宿を終えて  
右側が筆者 (門倉)

卒業してから早や4半世紀が過ぎようとしている。今までには様々な事があったが決して悪い人生ではないと感謝をしている。今ある私を運命づけた事はいくつもあるが、1年生の夏の秋田の合宿もその中の大きな岐路であった。浪人生活に終止符をうち、心湧んで大学生活を始め、入学と同時に運動をやりたいと思いきや、高校でやってきたバドミントンをやろうか迷ったが結果はバドミントンを選び入部をした。同期で入部したのは8人。千葉、大嶋、餘野木はレギュラーとしてコートに入る事も多く、残りのメンバーとは違うメニューで練習をしていた。最初の夏の合宿は秋田で行れた。私は普段の延長と

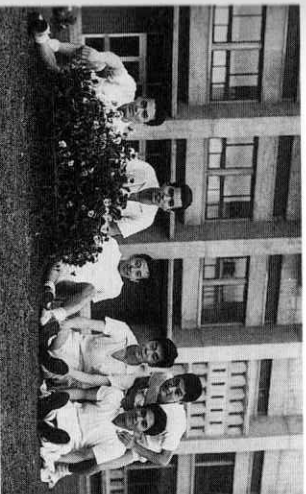
しか考えず軽い気持ちで出かけた。運命の岐路はここから始まった。合宿の初日の事である。レギュラーの3人は特訓につぐ特訓でコートからなかなか出してもらえず2—1の時間も回数も多く、始めての合宿参加の私の目には大変としか写らなかつた。その夜餘野木が腹が痛いと言いい病院へ出かけていったが盲腸炎という事でそのまま手術入院という事になった。翌日私は餘野木の後釜に放りこまれた。高校時代の鍛え方も大嶋や千葉とは違っていただろうし、浪人生活のグラブや4月から合宿までの練習メニューの違いもあるのに、特訓は容赦なく始められた。私は今でも血压が低いが、2—1やハイクリアの10分～15分が終ると目の前が真暗くなりコートの脇にヘナヘナとしやがみこんでしまうことが度々であった。山本さんや長谷川さんに体育館の裏へつれて行かれガラスやら小石のまじった砂地の上に正座をさせられたり、バケツの水を頭からかけられたり、竹箒でやしつけられたり、正氣に戻ると又コートに入られれ特訓が続いた。1日が終ると足の裏の皮はペロリと剥れ赤チンで消毒をしたがヒリヒリと痛んだ。朝起きると足の爪は血が死んで青くなっている。足はパンパンに張っているし、手は豆がつぶれて何かをにぎろうとしても感覚が違う。それでも痛さをこらえシューズをはき体をほぐしながら又コートへ出向いていった。不思議なものでコートの中で動き回っている間は痛みはまったく感じない。晩の食事は楽しみだったが上級生が、おいメシ！とおかわりの催促があちこちからくるのでおんびりではできなかったがそれでも昼間の苦しさを考えれば天国のようなものだった。パイプの2段ベッドで電灯の下で足や手の治療をしながら早く合宿が終らないかそればかりを願っていた。次の日もその次の日もおなじ特訓が続いた。疲れはどんどん溜ってくるので動きは鈍くなるので先輩のしごきは益々きつくなる。4日目か5日目の夜、もうこれ以上耐えられそうもないので合宿所を逃げだそうと考え、どういう風にしたらよいかあれこれと考え、2年生（誰だったか良く思い出せないが、小池さんか瓜生さんあたり？）に相談したら、もう少しだから頑張れと言われ思いとどまった。合宿の写真が数枚残っているが、自分でもびつくりする位頬がこけている所を見ると肉体的にも精神的にも限界だったのだろう。それでも何とか最終日を迎える事ができた。今考えると良くあの合宿を乗り切る事ができたと思う。おかげ様でその後の合宿や練習でつらくて逃げだそうとか、いやだとか思った記憶はまったくくない。秋田の合宿所は一刻も早く立ち去りたいと思い、市内や近所の名所や観光地めぐりもせず、新潟に住んでいる姉夫婦の家へ直行した。両足の

爪は全部黒くなりとれてしまった。秋田の合宿で頑張ったおかげでその後シギューラーの仲間入りをさせてもらいリーグ戦や早慶戦に出られる様になった。

4年間バドミントン部でたいした戦績は残せなく部への貢献は少なかったが、私の人生の中でバドミントン部生活を自分の力の限界までやりつくした事が大きな自信となっている事は事実だ。卒業後大丸に入社し今日に至っているが、その間困難な事がおきるたびに秋田の合宿を乗り切り4年間全力でやったバドミントン時代を思い、やれない事はない、できるはずだと考え、又耐える事で時を過ごす事もできる様になった。思えば秋田の合宿の初日の夜餘野木が盲腸にならなかつたら今の私はあるだろうか。餘野木がコートに入っていたら私の特訓はなかつたらう。あの特訓がなかつたら私はシギューラーにもならず、4年間バドミントン部に在籍しなかつたかもしれない。同期の渡辺のお父さんが大丸の専務をされていた縁で大丸に入社したが、それも無かつたかもしれない。そんな風に考えると秋田合宿は私の人生を運命づけた合宿なのである。

## 学連の思い出

渡辺 清司 (昭和43年卒)



1966.7  
日吉での練習の後で、  
左から2番目筆者 (渡辺)

部創立50周年お目出度うございます。

私は現在富士フイルムUSA勤務でニューヨーク郊外 (たまたま昨年開校した慶応高校の近く)に住んでおり、日本での行事や会合には全く参加できませんが、定期的に送られてくる部からの便りで我が校の活躍状況を楽しく読ませていただいております。

私にとってのバドミントン部での思い出は、学生バドミントン連盟に関連してのことが一番強く印象に残っております。

2年生の終り頃に学連委員になる様に言われ、最初「学連とは試合の時の運営や裏方をやる様な所」程度の認識しかありません。又、キツイ練習を少しはサボれるかなという様な簡単な気持ちで携わりました。

1年先輩の二方副委員長 (当時) の後に始終くっついて、全てを教えていただきましたが、知れば知るほど連盟委員の責任と大変さがわ

かってきました。当時学連は本来の学生連盟の機能としての各種大会の運営と同時に、日本バドミントン協会の下部組織としての機能の両方を持っておりました。

日本協会大会、総会等があるときは山の上ホテル等に泊込みで資料作成等の準備を行ったり、議事録作成等のお手伝いを致しました。当時の日本協会の会長は、東京ガスの本田社長さんで、これ等の総会等の後で当時協合理事長の森友大先輩のお伴として、学生の身分ではとても足を踏み入れる事の出来ない様な料亭に連れて行っていただいたことも記憶にあります。

学連において慶応は伝統的に全日本学連か関東学連の委員長に1年毎に就任しており、1966年二方先輩が入望も厚く全日本学連の委員長に就任されました。

学連委員としての仕事は多く、札幌、仙台、大阪等で全日本、東日本、西日本大会等を主催すると同時に連盟を運営してゆくため、各大会からの加盟費の徴収とその催促、シャトルコックの認定と、各大会後に試合に使用したシャトルの販売（予算の少ない大学からは大会前オーダーが入っていました）又、各大会のパンフレットに色々な企業に広告協賛のお願いに回ったり、随分先輩の方々にご無理をお願い致しました。そして、これ等の預金を銀行預金に入れ少しでも利子かせいじたりして、運営費のやりくりもやっておりました。

この間の経験が社会人としてスタートした時、随分役に立ったと思っております。この様な活動の為、ほとんど毎日原宿の岸記念体育館に通っており、三田の体育会本部にもめったに行かず、日吉の記念館すら行くのも練習が終ってしまった時刻になる事もしばしばで、二方先輩の当時の愛車パブリカ号で、日吉の駅裏の麻雀荘に直行した事も何度かありました。

各大会のときの試合の組み合わせは各校から来ている学連委員が協議して決めていた訳ですが、ややもすると当時強かった大学の委員が、自校の選手に有利に主張するところを伝統ある慶応の発言力で、極力公平に組み合わせを変更させた事もあります。

我々も時に全日本や新人戦では、慶応の選手がせめて1回戦だけでも勝てる様にと、苦心して組み合わせを行っていましたが、無名の選手の中に強いのかいてせっかくの親心が実らなかつた失敗もありました。勿論自分も選手として参加する事もあり、出来るだけ弱そうな相手を選んだ積もりが、日頃の練習不足がたたつてあえなく敗退する事もありました。

二方全日本委員長の翌年は、本来なら私は関東学連の委員長になる筈だったのですが、慶応は関東学連の2部であり、2部校が関東の委員長になる事は不自然(?)との事で、2年連続で全日本の委員長になりました。

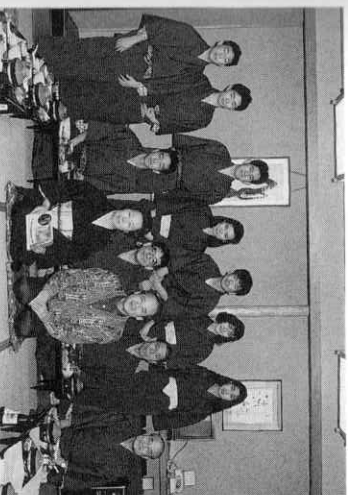
そのお陰で、第3回国際学生バドミントン大会(1967年セイロン/コロンボ)に、当時九州大学の和田教授を監督に、私もアシストメンバージャーとして立教、法政の選手を連れて参加、インドネシアに負けただものの2位の成績を挙げ大変貴重な経験も出来ました。

これ等は全て伝統のある慶応から学連委員として出向していた為であり、この慶応の伝統を培ってこられた諸先輩方に改めて感謝申し上げますと共に、今後の学生諸君にも是非この伝統を意義あるものに築き上げてゆく事をお願いし、又、期待しております。

慶応義塾大学体育会バドミントン部の益々の発展を祈念致します。

## 熱海『法悦』に徳用さんを訪ねて

金原(大嶋)俊次(昭和43年卒)



1992.2.11  
「法悦」にて 徳用夫妻を囲んで

毎年の熱海での卒業生送別会も回を重ね、今日では法悦での送別会に招待を受けたOBの方が多くなった。そこでこの熱海での宴について、ご招待下さる徳用さんに色々とお話を伺い記事とする事が企画された。

1991年12月1日、師走に入ったと言うのに暖かい日曜日に、約束より少し早く午後1時半頃「法悦」を訪ねた。以下その時のお話である。

金原 早速ですが、卒業生がご招待いただくようになったのはいつ頃からですか。

徳用 そうね、この旅館を始めたのが昭和39年でその年からですね、昭和39年の卒業生は鈴木君達で当時の監督が越川君でしたね、そう、もう28年になるんですね。

金原 随分と永く続けていられますね、来年度は50周年を迎える訳ですから、その半分以上のOB・OGがお世話になっていることになりましたね。ところでこの会を始められた理由と言うか、動機と言ったものは何だったのですか。

徳用 ウーン、そうですね、要はバドミントン部に愛着を持って



たんですわね。

東京を離れて1人熱海で仕事をするようになって、部から会合のご案内を頂いたりするのですが、忙しくて皆さんと会うことも出来ず、何か交流を持ちたいと思っていたのです。それが又自分の人生の励みになればと思っていたのです。その頃に2年後輩の吉田君や岡本君とかに軽い気持ちで、「今度遊びにきてくれよ」と言っていたのですが、こちらが旅館と言うことで相手もなかなか来にくいのではないかと思いい、それなら一層、部長監督の慰労と、卒業生のお祝いの招待をしようと思っただのです。

旅館を始めた頃は借金だらけでしたし、背水の陣でこの商売を始めましたので、この会が出来る間は商売が順調に出来ることだと心に決め、又、この会が続けられる様に商売を頑張ろうと思いい、いつまで続けられるかわからないけど、何て言うか、1種の賭ける気持ちで家内に相談したんです。

そうしたら「是非おやりなさい」と言われ始めたんです。

金原 当時は大変なご苦労をされたのですわね、それにしてもこんなに永く続けられた秘訣みたいなのは何かあるのでしょうか。

徳用 そうですわね、動機はそんな訳で始めたのですが、今日まで続けられた要因は何と言っても32年組の人達が陰になり日向になり尽力してくれたお陰で、事あるごとに「感謝しています」と言って私を持ち上げてくれたりするものですから、ついその気になって続けてきたんですわ。又、部長先生も毎回欠かさず楽しみにして来て下さるし、監督さんやOBの人達が支えて下さって続けられたと思っています。

学生さんは毎年入れ替わるけど、監督さんの苦労話やOBの人達の話をして1年に1度聞かせて頂くのも、自分自身の楽しみになっていますわね。又、最近ではOBの皆さんも立派になられて、2次会は下(熱海の町)でOBの方々が設定して下さったりする事も、金銭的な事は別にして続けられた理由の1つでもありますわね。

金原 本当に永く続けて頂いたお陰で、最近ではOBの内でも熱海経験者の方が多くなってきましたわね。(笑い)

徳用 そうそう、最初は純粹な気持ちで始めたのですが続いている内に皆さん会社の旅行や何かかに、学生時代に行った徳用の所へ行ってみようかと気にかけて戴けるようになってきました。そんなこと計算して始めたのではないんですけれど、永い歴史の中でそう考えて下さる方がいると「あー、やって良かったなあ」と思うと同時に「有難い事だなあ」と思いますわね。

金原 28年の間には苦労も多かったのだと思いますが、いかがですか。

徳用 2～3年前に人手が本当に足りなくなってしまうと、今年には辞退させてもらおうかと思っただけです。しかし卒業生にとつては毎年1回のことですから、これは万難を排してもやらなくてはいけないと思います、その日だけ他から人手を借りてきてやり繰りしたこともありました。今でも人手の問題は大変ですけど、お陰様で何とかやれています。

又、家内が本当に気持ち良く理解してくれている事も大切ですね。皆さんが見えたお座敷に顔も出さなかったら、皆遠慮して来なくなってしまうからね。

金原 いつも奥様がお挨拶にお見えになられて、本当に恐縮しますけど、嬉しいですね。

徳用 僕も、昨年還暦を迎えたんですが、部はずっと続いてゆく訳だし、これから先どうしようかなんて家内と話したりして、2人で養老院に入った後は旅館が続く限り息子に後を頼まなくて、なんて笑ったんですけどね。(笑い)

金原 そういうお話が出来る位に永く続いていると言うことで素晴らしいと思いますね。

話は尽きず続きましたが、以上でインタビューの原稿は一応終りにさせて戴きます。今後ともどうか未長く、宣しくとお願ひし法悦を後にしました。

---

## ノ連遠征

西沖 晃 (昭和44年卒)

思えば、私の学生時代も日頃思い出す事も少ないのですが、私なりに色々な出来事があり、青春の楽しさ、苦しさが入り混じって、なつかしい思いがよぎってきます。

昭和40年に入部した年は、入学直前の春のリーグ戦で、慶応が創部以来初めて2部に落ち、夏の練習では、危機を感じたOBの方々が大勢日吉に来られ、トレーニングで真夏の炎天下にものごく絞られたことも、今となっては楽しい思い出です。当時の山本主将、藤田副主将等4年生の方々の悲壮な姿に頑張っておられた姿が、今でも目に浮



1967.10.24  
第18回インカシ(大阪)にて  
前列白のセーターが筆者(西中)

かびます。私にとって、大学の4年間を通じての最大の出来事は、何ととっても4年のキャプテンの時に、2部で優勝して1部復帰を果たした事ですが、これについては、同期の山本が思い出を書く予定になっている様ですので、割愛します。

小生にとって、もう一つの大きな思い出は3年の夏、高校の顧問の先生の縁で大変お世話になっている望月・登坂両先輩と一緒に、日ソ友好祭の一環として、ソ連に遠征をした事です。新潟よりナホトカ造船、ナホトカからハバロフスク造船

車、ハバロフスクからカザン造船飛行機等とバラエタイに富んだ旅行でした。ナホトカ造船の船の中では、船倉の1番下に閉じ込められ、真夏にもかかわらず冷房もなく、海面よりも下のため、空気の入れ替えのないところへ、エンジン・ルームの隣でベッドの鉄パイプも熱くなっているといった状態で、さすがの私も、ここでは眠れず、外のソファで寝たものでした。その後は、誠に快適な旅で、ボルガ川のほとりでの試合、ソ連の選手団との交流、水泳、又その後のモスクワでの再試合、キエフ、ターリン等の旅行も本当に楽しいものでした。なかなか内陸まで入る機会は少ないと思いますので、貴重な経験でした。その秋のリーグ戦では、どういうわけか全勝し、ほっとしたものです。部の皆さんには、夏の合宿不在で御迷惑をおかけしましたが、ソ連での経験が、心理面での充実にか影響したように思われます。

それにしても、あれだけ強固な全体主義体制を誇ってきたソ連邦の最近の崩壊は、この20年も前の私のソ連遠征の思い出とともに、大きな時の流れと感慨を禁じえません。

慶応のバドミントン部男子も、今は3部に甘んじているようですが、皆がより一層力を合わせて頑張っていけば、又近い将来、1部で頑張れる日が来るものと確信しています。現役の諸君、大いに頑張ってください。

## 我がバドミントン人生

山本 次生 (昭和44年卒)



1968.3

前橋合宿にて  
右から林、山本(筆者)、西沖、  
須々木、大村(五味)、松本(北嶋)

私が、バドミントン部に入ったのは、確か10月。入学時の身体検査のツベルクリンがマイナス反応だったためです。前期終ったところで、体育担当の兵藤先生に相談したところ、「ツベルクリン何か、気にする必要なし。バドミントン部なら入ってよし。」との貴重なお言葉。ちょうどその頃、1部から2部に落ち、山本洋彦さんが、ゲキいれ、伊丹さん、小池さん、蒔田さんが、がんがんひっぱっていました。1年上の角倉さん、餘野木さん

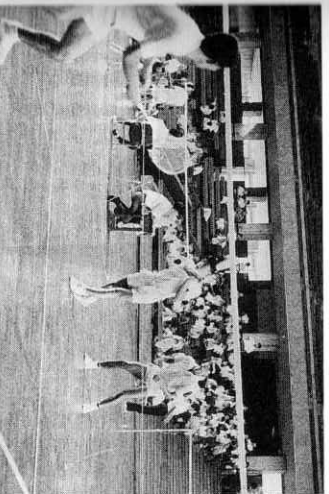
ものっていた感じ。千葉さん、大嶋さんは、結構冷静だったような。(いや、そう思い込んでいたのかも知れませんが。) 2年の時はまだ、大学生生活を体育会だけに終らせたくないとあちこち顔をつっこんでいました。しかし、あの“坊主頭”事件以来、あいつは体育会というレッテルをはられ、自分自身も腰がすわった感じです。3年になると、体力もできてきましたし、どういうわけか、千葉さんも、大嶋さんも、やさしい先輩にかわっていて、いやな思い出は、ほとんどなし。女子部員は少なかつたんですが、水野さんはじめ素敵な人が多かつた。同期の北島も五味も女性らしかつたし、下の川崎も明るくかわいかつたし。伊丹さんなどは、主将の特権で、個人指名で奥さんとなる人決めてしまうし。(決断力と実行力ありました。) いわゆる、昔風の体育会から変わる過渡期が、あの数年だったのではないでしようか。帽子も義務でなくなつたし、上下関係もゆるやかになつたし。しかし、これは、1年下の、平井、佐々木の貢献大(?) ですが。4年の秋まで2部。4年の時は、すっかり2部生活になれ、おまけに、春は初の2部Bクラス。先輩もあまり期待されなくなり少し気楽でした。でも、吉田監督もよく顔出されたし、あの独身(当時) 3羽ガラス、鈴木さん、田中さん、井上さんもよく練習につきあつて下さいました。精神的負担がなく、それでいて、練習は結構やりましたから、それが、秋の1部昇格につながつたのだと思います。チームの雰囲気も良かったです。ひょうひょうとして何考えているかわからないように、何か考えている西沖、辛口の批評家で軌道修正してくれる林。私も、ちよつと強くなりました。(アルコールはまったくだめ

で、西沖とよく練習の後、クリームあんみつ食べに行きました。)3年には、佐藤、平井、佐々木という、性格ばらばら、行動ばらばらながら強いのがそろっていました。古沢という野武士みたいなものもいましたし。今考えれば、条件そろっていました。試合で1つだけよくおぼえているのは、対青山大戦で、4—4で最終シンドルの私にまわってきた時のフレイナルゲーム前のインターバル。応援に来られていた伊丹さんの、「お前をあてにはしていなかったんだからここまでやればもういいよ！」という言葉。それに奮起したのか、ブスツとしたのかおぼえていないのですが、その試合に勝って、次の日体戦につなげられた事。

秋の就職の相談で、前から関心のあった海外でのボランティア活動、青年海外協力隊に入りたいと平先生にお話したら、「いいんじゃないの、慶応からそういうの1人いても。」とのお返事。心強くして就職。技術を持たない自分は、技術を持つ隊員のお手伝いをするつもりで入ったのが、1年半後に、たまたまネパールから、バドミントン・コーチという要請があったので受験。受験生が全国で唯1人というラッキーマもあって合格、3年間、隊員生活を送ってきました。向うでは、コーチするというより、一緒にプレーして遊んできたという感じ。あまり強くはできませんでしたが、仲間をずいぶんつくれました。帰国した1ヶ月後の東海道線の電車の中。慶早戦に行く時、隣に立たれたのが、あの中山紀子さん。はずかしながら、山本ですがと声をおかけしたのが縁で、ナショナル・チームのマネージャーに。普段ひかえ目な私、あの時だけはずうずうしく声をかけた。あの一声で、私の人生が変わったと今でも思っています。マネージャーになったのはいいが、「同じ慶応で同じ山本でこうもちがうか」と洋彦先輩とよく比べられ小さい心を痛めました。それから1年後。又ネパールに帰りたくなーと思っていたところへ、サントリーから監督の話。これは、宮永さんが、サントリーバドミントン・チーム創部にかかわっておられ、監督の人選を頼まれていたそう、パイオニア精神があり、女性問題をおこさない安全パイということで推薦してくださったそうです。あれから、早や15年が過ぎました。幸い、コーチ、選手に恵まれ、好成績をあげています。慶応の体育会バドミントン部に入ったことよって方向づけられた自分の人生というのを感じますし、又先輩方や後輩諸君に様々なかたちで助けられて今日の自分があるなーと感謝しています。本当にいい大学生活を送れたと今でも思っています。

## バドミントンの思い出『1部昇格』

佐々木 慶男 (昭和45年卒)



1967.9.10

早慶バドミントン定期戦

山本・佐々木組 (右側が筆者)

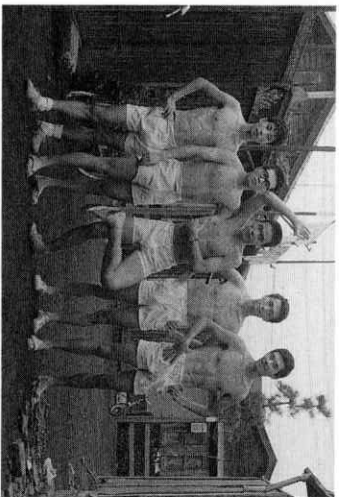
バドミントン部創立50周年おめでとうございませう。

この記念に際して寄稿するよう先輩より依頼を受け、昔にちよつと思いをめぐらしてみただけですが、25年も前のことで、しかもその後はほとんどラケットを握っていませんでした。思い出そうにもストーリーにならないのですが、思いつくままに昔を懐かしみたいです。

私のバド歴は高校の3年間と浪人生活を挟んだ大学4年の7年間です。バドを始めたきっかけは、中学時代にテニスバドをやっていたので高校では何かのスポーツで活躍したいという漠然とした思いで、高校の体育館へ見学に行ったところ、バドをやっていた同じ町の出身者に強引に入部させられたということです。高校の練習は非常にきびしく、しかも軍隊方式だったため何度もやめようとしたのですが、その都度彼に慰留されている内に1年秋の秋田県新人大会で準優勝したことが本格的にバドと取り組むきっかけとなりました。その後県の大会ではいつも2位だったのですが、3年春に1度だけ、いつもの優勝者が途中で負け、自分が優勝したということがあります。しかし当時の自分にはその様なことについて特別の感慨はなかったので、卒業して1人上京し浪人していた時に初めて「自分は秋田で優勝したんだ、他人よりも苦しい練習をしたんだからがんばれるはずだ」と自分を発奮させたことを思い出します。

そしてようやく大学です。入部してすぐ感じたことは先輩達の1部リーグ復帰への恐ろしいまでの執念でした。1年間の浪人生活ですっかり筋力が衰えていたので、当時の自分の課題はバドが強くなることよりも練習についていくことだったように思われます。

そして大学初めての公式戦が早慶戦だったと思いますが、後藤選手とのシングルで当初9—0でリードしていたものが、「これなら勝てる」と思ったのが敗因のもと、その後は1点もとれずに逆転負けしたのです。この試合はかなりシヨックだったので、何の反省もないまま翌日からの練習に埋もれていたようです。今思うとこの試合が学生を通しての最大ポイントであり、ここで自分に何か帰すものがあ



1971.8  
同期の仲間（野田の合宿にて）  
右から佐々木（筆者）、本牧、  
古沢、佐藤、平井

ればと悔やまれます。

もう1つの記憶に残る試合は、寺前選手という、全日本級の選手だったと思いますが、どんな球をどこに打っても全て返され、“壁とはこのことか”と思ったことがありました。当時はまだ、やればできるというかすかな自信を持っていた頃だったので、実力の違いがこんなに大きいものかと唾然としたことがあります。

最後に、今だに同期の連中に話題にされている楽しい思い出があります。

あれは、3年秋のリーグ戦で1部リーグに上がれるかどうかという関学との入替戦です。我らの同期は佐藤、平井、本牧、古沢、後藤（山本）と男は6人おり、その試合の前日、会場に近い古沢のアパートに全員集合したのです。集まれば飲むのは当然ですが、皆は早々に寝込んだのに、酒に弱かった自分は誰かと延々と飲み続けていたのです。それは、いつもの無様な試合を酒の勢いで全く違ったものにできないかという密かな期待からだったのですが、案の定、翌日は二日酔い、“しめた”と思ったのでしょうか、会場に向うタクシーの窓から入り込む風のさわやかさを今でも覚えています。そして試合は第5シングル、自分が勝てば1部昇格というケースで、相手は松本選手という自分と同レベルの選手です。ラリーは有利に展開できるのですが、シングルのサービスマスが入らないのです。普通に打つとオーバーするし、手加減するとショットし、打込まれるということで、自分にも不思議な試合でした。結局は勝って1部に昇格したのですが、応援してくれた人からすれば、見るに耐えない試合だったろうし、同期の連中からはさんざんに酷評され、今だに会うと酒の肴にされています。

この様にして7年間のバッド生活を締めた訳ですが、今でも何かで籍地に立った時には、“何のための7年間だったのか”と自分に問いかけ、発奮材料にしていることからすると、自分にとってこの7年間は一生の宝であると云えましょう。

## 祝創部50年・恥ずかしの記

金子 寛 (昭和49年卒)

バドミントンは魔物である。撮り憑かれたら離れられない魅力がある。こうした思いを抱かせてくれたのが我が慶応バド部である。素人の私が入部当初コートでくり広げられる先輩のプレーを見て芸術的なあと無意識に考えていたと思う。佐藤信夫さんのきれいなバックハンド、平井さんのインパクト直前に微妙に震えるラケットさばき、本牧さん、佐々木さんの実にスラートな切れ味の良さ、古沢さんのドロ臭さ(失礼)の中の粘り強さ等感じ入った覚えが脳裡に焼き付いている。

### [1] 練習の思い出

高校まで部活動の経験のない私には、先ず練習がつかかった。日吉合宿恒例の下田コース10Kマラソン、途中の神社の休憩は1瞬の清涼剤であった。400mトラツクのウサギ跳び(宮崎博さんの得意技であった)、並木の坂道ダツシユ一吐き気がしても出て来ない辛さ、2-1のクリヤー4面回し、2-1フリーの8面回し、又練習中声が届いたらダツシユして来いという古沢さんの懐かしい声、トレーニング中右足の裏に激痛を覚え下田の病院に連れて行かれ、先輩の見守る中で足裏に太い注射を打たれた時の痛さと先輩の温かさ等々。鈴木英夫さんの「ゴメンナ」は今だに耳に焼きついている。宮崎博さんには、スラツシユを打つと「金子のはハエが追い越すよ」とよく言われ納得したり、あの独特のフエイメントについて行けず、「なぜ逆に動くんだ?」と激をとばされフエイメントに懂れた。2年次(1970年)第18回早慶戦前日の練習後、福島主将(46)から、「金子やってみるか」と言われた時の嬉しさと動悸が高鳴ったこと。当日の相手は同期の松下高輝選手で、7本、8本で負け、主将の所へ行くと「そうかあ」と福島さんの言葉は優しく響いた。

### [2] 合宿の思い出

1969年1年次夏合宿は釜石、納会で同級生1人が酔って乱れ宿舎をどび出し、川原でやっと思見した事。1970年逗子合宿、砂浜でのダツシユのきつかったことと暑さ。3、4年次は大垣市。揖斐電の須崎社長(水球OB)、故・谷 亮先生(大垣第1女子高)、宮崎さん(47)の御厚意で2年連続「玉子屋旅館」・佐竹さん(35)、山田さん(37)



はじめ諸先輩や、宮永監督のお力で天野博江さんも来て下さった。揖斐電の御厚意で大垣三田会の方々と豪華なレストランで大変御馳走になった。

[3] さん梅

2年次後半になり、中村さん(46)がよく学食に誘ってくれ昼食など御馳走になり、金のない私とはかく嬉しかった。これが私の2年間のドジャネへの道に秘かに通じていたのだが、本当に貴重な経験をさせて頂いたと感謝している。監督は吉田さん(32)から宮永さん(38)に変わっており、お2人には公私共に大変お世話になると共に逆に失礼が多かったこと極まりなかったこと又当時の現役にも同様お詫びしようがない。新人団体Bが私の遅刻で棄権になってしまった。部員も4年次には24名に増え活気づく半面、シヤトル代の借金も増えた。やりくりの下手、計画性の無さ、OB費徴収の努力不足等で上野主将にも多大な迷惑を掛け、又次の峰村君へ大変苦勞を掛けてしまった。そんな中でOBに直接会うのが1番と歩き回り、初対面でも忙しい中貴重な時間を割いてくださり、会費を提供して頂き現役の様子など聞いて下さった諸先輩に改めて感謝したい。

[4] OB通信

1971年の1年間は伊丹さん(42)の御厚意で通信を出して頂いた。奥様にも多大な御迷惑がかったと思う。田町のホームで伊丹さんと打ち合せの待ち合わせをしたが、よく私は遅れて迷惑を掛けてしまった。OBの方々からの近況や慶弔、住所変更など非常に充実した紙面にして頂いた。翌年から私が引き継いだが、その御苦勞を身にしみて実感した。

[5] 30周年記念行事(1972年6月18日)

何をどうしていいか五里霧中で準備会に出席した。新橋の岡本さん(32)の伊勢半ビルの1室は大変御厄介になった。平部長、吹野OB会長、橋本、大塚、前田、徳用、吉田、岡本、越川、尾関、安川、宮永、渡辺(輝)、福田(辰)、井上、田中、西沖、林、浜野(巖)、平井、福島、鈴木さんほか大勢のOBの方々の熱い議論に耳を傾けるだけだった。会計は6月に結婚式を控えた浜野巖(43)さんで大変御苦勞を掛けた。部誌編集責任者の井上さん(39)は確か新婚で、上野君らと押しかけ、奥様がすっぱいものが食べたいと夏ミカンを頂きながら、アーそういうものかトドキドキしたことも懐かしい。

[6] 先輩

その井上さんは、鈴木明さん、田中さんと共にコーチだった。多忙

な勤めの帰りに記念館に頻繁に寄って御指導頂いた。井上さんは、コートを描いた紙に、ラリーのコースを記入し、試合後それをもとに緻密なアドヴァイスをして下さった。変って金原さんがコーチになられ、やはり仕事は大丈夫かと思われるほど公私共に現役と接して頂いた。

#### [7] 最後に

平部長の温厚で誠実な人柄、兵藤先生のヴァイタリテイ、私共にとつては皆素晴らしい手本である。代々の諸先輩の築き上げられた伝統を守るのではなくその上に新しいものを積み重ねることが使命である。年代こそ違え、同じコートで汗を流した者同志、心の支えであり誇りであり、かつ財産である。いつも全国に素晴らしい仲間がいることは本場に有難いと思うと共に、自分もそういうOBでなければならぬと自戒の念も込めて、さらに60年、70年と益々部の発展を祈りつつ、微力乍ら応援しなければと思っている。気合と闘争心あふれる現役の活躍を願っている。

---

## 何事も“好きでやる奴にはかなわない”

上野 利三 (昭和48年卒)

学窓を出てから早20年の歳月がゆき過ぎました。様々な思いが胸をよぎります。その間、大好きだった父は既に亡く、優しくしてくれた先輩は事故で記憶を失い、大切な友は一流企画をやめてしまいました。人生30、40を越すと色々なことに出くわします。

今、学窓を巣立つ学生達をあずかる身となり、彼らに学問以外にも伝えておきたい多くの事柄があることを痛感します。私自身、4年間の学生生活でバドミントンという1つの事に無我夢中で打ち込むことができたことは、何にもまして大変幸せなことでした。

創部30周年記念のとき、私はたまたま部の主将をつとめていました。部歌の作詞を部員の誰かがやっては、と言うOB会からの発案で、恥ずかしながらも私の1晩で書いた詩が採用されました。夜中の1時から4時半の間に碑文谷の下宿で作りました。記念式典の前に招待試合が行われ、当時の単・複の学生チャンピオンだった選手3名と対戦しました。連ちゃんでしたが、主将として行事の準備もあり、精神的にも減入っていましたので、体の仕上がりは万全ではなく、文字通り儀礼的な試合に終了してしまいました。3人(谷口君、草島君、田所君)とも高校時代からの友人でしたので、このことを察してくれてか、動

きはふだん通りでしたか時たま甘い球をくれてラリーをつなげてくれたように思います。

10年、20年以前の先輩達のそうそうたる戦績に比ぶべくもありませんが、2年続けて東日本大会でベスト4に入り、インカレ東西對抗戦の東日本代表にも選ばれ、何とか30周年の節目の年に面目を果たしたい気持ちがありました。

私には兄姉が2人ずつおり、兄はテニス（インハイベスト8）、姉2人はバドミントン（県1位、1人はインハイベスト16）という環境でしたから、自然と私は中学からラケットを握る運命にあったようです。そうしたことから我が家は天理ではバドミントン一家という異称がありました。中・高と近畿大会では優勝しましたが、インターハイでは、団体で後に早大へ進んだ二上君の高岡商に、個人戦でも法大へ行つた草島君にそれぞれ準々決勝で敗れ、国体（団体）では日大に進んだ藤君に3位決定戦で涙のみました。

慶応に進学してからも私は彼らと対戦しますが、2年までは全く歯が立ちませんでした。ようやく3年になってからは、ぼつぼつ大切な試合で勝てるようになりました。それは2年生終了間際の春合宿前後に一心不乱で練習をつんだことが実を結んだからだと思います。スラソナから脱する正念場だと自覚していました。私は強いプレイヤーほど中身のある練習をやっている、量的にも人1倍やっていると思っていました。ですから、そういう人達に打ち勝つには、彼等の数倍もの練習をやらなければならぬ。それも人からいわれるのではなくて自分から、心の底から“よしやるう”と思つてやらなくてはならない。またたとえ数倍の時間をかけても、その中に“工夫する”ということがなくてはダメです。

私は、今の職業でもそうですが、“好きでやっている奴にはかなわない”と思っています。強い選手（元々強い人はいないのであり、また強いから勝つのではなくて勝つから強いのです）は素質に加えて、バドミントンが好きで好きでたまらない、のだと思うのです。そういう人はもう練習の奴僕みたいな人です。益も正月も練習に明け暮れています。病気も練習で直すくらいのが気迫をもっています。タバコも酒も女も車も一切節している筈です。私のような未熟者でさえ1日3時間部の練習の後、1年生か2年生を伴って薄暗くなった綱島街道を8～10Km程よく走りに出たものです。戻つてくると髪をおかずにロータリー（200m）を1、2周かまむし谷の階段を一気にうさぎ飛びし、足が疲ればすぐ腹筋に移つて足を安め、次は腕立て伏せと、そ

れらを何回かくり返して、それから風呂に飛び込みさつぱりして帰宅する、という毎日でした。競技場を50周とか、府中まで往復とかも1人でしたこともあります。しんどいけれど何か充実していて、結構楽しかったものです。その都度練習したことが身につく（例えばスタミナ）のが肌で実感できましたし、勝てる相手にはより楽に勝てるようになったからです。

しかしそこまでしたつもりでも、私の残せた記録はたかだか叙上の微少なものにすぎませんでした。

今私は、ラケットを握っていたのと同じ手にペンを持ち換えて、もの書きとしての生活を楽しんでいます。講義（日本政治史）の合間に年間1000枚くらいの原稿を書くことを自らに課していますが、結構しんどいものです。しかしなぜかそれが楽しいのです。生産物は私の発明品であるとともに、私の“息子”でもあります。一生涯の職業にめぐり逢えた喜びをふかくかみしめています。

しかしそうした原点は、学生時代に精魂を傾けることのできたバドミントンの生活があればこそである、といってもいいと思います。慶応大学バドミントン部に一生感謝。えいえいと部のいしずえを築かれた諸先輩達に感謝。そして今築きつつある現役諸君にも感謝します。それから卒業後20年以上も前の膨大な部の記録、資料を大事に保管していてくれて送ってくれた当時のマネージャー（金子君）の偉大さに今更ながら感激をしました。サンキュー。

---

## 監督の記

吉田 格麿（昭和32年卒）

1962年度の納会の頃、監督の交代が行われた。岡さん（1955卒）から越川（1958年卒）君へのバトソタツチだった。

その頃の一部のOBの中には「かつての栄光を再び。」と、監督に対して非常に大きな期待を持つ人が多く、「関東大学リーグ戦（1部）と全日本大学選手権で塾を優勝させることが監督たる者の義務である。」といったような考え方を持っていたのであった。

その頃の部の実情と云えば、インターハイ出場の高校生を受験させても、補欠にすら引つかからないほどの入学難で、とても大学の頂点を極められるような陣容ではなかった。一方他校と云えば、中でも中央、法政、立教は高校生のトップクラスを集め厚い選手層を誇りリ-

テ戦の優勝をたらい回ししていた。

新興勢力としては早稲田なども、実績のある高校生の入学に成功して、次第に力をつけてきていた。

部の実績をよく知ったOBからは、越川君がこうしたOBの圧力に負けないで監督を勤めるためには、間に立つ役割の人間が必要と考えられるようになり、そこで誕生したのが助監督であった。

それまでなにかにつけて、OB会に顔を出していたことや、自身の気楽さもあって、助監督を引き受ける羽目になった、と記憶している。

翌年の春、このころより恒例となってきた、徳用(旧姓羽田)さん(1955年卒) 経営の旅荘法悦へその年の卒業生と共に招待していただいた帰り道、突然越川監督から大阪転勤の話を開かされた。

結局、そのまま持ち上がりということで助監督から監督に就任した。監督は7年間やったが、監督時代の思い出としては亡くなった森友さん(1944年卒)との思い出に深いものがある。

森友さんは本当にバドミントンを愛し、一生懸命にバドミントンに尽くしていた。ひと頃部の方にあまり顔を見せないときもあったが、その時は日本協会で忙しいときだった。

現在の日本協会が社団法人に発展したのも森友さんの力だと思う。慶早戦のことも印象が深い。就任1年目で慶早戦開始以来の11連勝にストップをかける敗戦を喫したときのことである。まさか負けるとは思ってもみなかったが負けってしまった。

負けた後、4年生を中心に部の雰囲気がかたやイーソと糸を張りつめたように変わった。

ことに、インカレ団体準優勝はすごかった。当時の力としては、ベスト4がいいところで、よく準優勝したものだと思う。

準決勝で中央に勝ったのだが、当時の中央は慶応には勝てると思っていたはずで、その中央に3―1で勝っている。この原動力は、慶早戦に負けたことが部員の奮起を呼び起こし、気合いの入った練習を積み、なんとしてでもインカレに優勝して汚名を晴らそうとした努力の賜物。主力の4年生が卒業した翌年は、チーム力が低下して初の2部転落となった。早朝練習など、気合い負けだけはしないようにと部員全員頑張ったが及ばなかった。

高校生を勧誘するために、インターハイは勿論のこと関東地方の高校の大会はほとんど見に出かけた。そこでバドミントン界のいろいろな人との出会もあった。しかし、強力選手の入学はままならず、部の強化はなかなか出来なかった。

結局7年間監督をやった。この間、学生の気質は次第に合理性を尊ぶようになり、練習ひとつをするのにも、きちんと理屈が通ったことは納得してやるが、そうでないとなかなかやらないといったようになって行った。

監督をやめるに当たって、吹野さんのところへ行った時、「お前は何年(監督を)やったか。」と聞かれたので「7年やりました。」と答えると「自分は6年だった。自分より長くやったのだから(やめても)しかたないな。」と言われたことを覚えている。

長く監督をやったが、勝負運というか、めぐり合わせというか、戦績にはこれといった成果がなかったのは残念。そんなことを感じ始めたときが「監督をやめよう」と思うきっかけであった。

監督をやったのはたたくさんであった。

なんといっても若い人達と知り合え、その人達とは今だに交流があり、正月になるとわざわざ訪ねてきてくれる人もいる。

監督をやった7年間は私の人生の財産である。この財産は一生大切にしたい。